

マリア信仰における憐みの心性について

仲島 陽一

キリスト教における「聖母マリア」の観念と、「憐れみ」の「心性」との関係が、本稿の検討課題である。

「聖母マリア」がキリスト教の重要な要素として大きな位置を占めることは言うまでもない。その信者でないだけでなくその知識も十分と言えない「ふつうの日本人」にとっても、敢えて言えばイエス・キリストに劣らぬほど、キリスト教の象徴になっている。しかし教義的には必ずしも中心に位置づけられてはおらず、また歴史的にかなりの変動を経、また論議もされてきた。以下では史的にたどりながら考察していきたい。

一 古代

イエス在世中にマリア信仰はもとより、マリアが特別視されていたとは考えられない。福音書のうち最も早く成立したマルコ伝では、唯一言及するのは、むしろ彼女が特別視されるべきでないという文脈においてである。すなわちイエスの帰宅時、母と兄弟たちが来たので、イエスのまわりの人々に彼等が捜していると伝えられると、彼は「私の母、私の兄弟とは誰か」と言い返し、「神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」と言い放っている（マルコ3：31-35）¹⁾。この記事はマタイ（12：46-50）、ルカ（8：19-21）にもみえる。ルカ（11：27-28）の記述も同方向である。ヨハネ（2：4）は、力点がそこにはないことは明らかだが、この認識も含んでいると言えるであろうか。「福音書」の成立に先立つパウロの書簡でも、マリアは無名の「女」として扱われ、特別視されていたとは考えられない（ガラテア、4：4）。

しかし有名なイエスの受胎の記事はそうでないと言われるかもしれない。マタイ（1：18-25）とルカ（1：26-56）の記す、聖霊による処女マリアの懐胎である。ここで考えなければならないのは、聖書が一人によって一気に記されたものでなく、いくつもの資料や記者が複雑に利用され編集された過程の産物であることである。「聖霊による受胎」は、イエス生前はもとより、パウロ活躍の時期にもなく、その後生じた観念として、Q資料に入ってきたのではなかろうか。「福音書が書かれた時代とともにマリアの信仰者としての格が上がっていった」²⁾。その直接の理由としては、イエスそのものの「格が上がっていった」ことが考えられよう。すなわちイエスを単なる教祖でなく「神の子」と位置づけようとする意向であり、そのためには彼を大工ヨセフの子にはできない。ところでマタイとルカの並行記事の間でもいろいろな違いがあるが、その一つが、前者ではこれを旧

約の成就と位置付けている(1・22-23)ことがある。これはマタイの編集句と考えられる。もろもろの出来事を旧約予言の実現と解し、ユダヤ教とイエスの教えとの連続性を強調するのがまさにマタイの特徴だからである。さて問題の「予言」は旧約イザヤ書(7・14)であり、新共同訳ではどちらの箇所も「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む」である。ところが、旧約のこの箇所の「おとめ」almahは「少女」の意味であり「処女」の意味ではない。新約のギリシャ語のparthenosは日本語の「おとめ」同様どちらの意味にもなる³⁾ので、マタイは語の意味をずらして、マリアの「処女」受胎という観念を、旧約によって強引に合理化したのである。

このような「創作」の主原因がイエスの神格化であろうが、副次的な要因の示唆もある。竹下氏は、マリアをシンボルとする純潔志向がその後風靡していったことを言う⁴⁾。「処女性」の重視がこの時点で果たして、またどれほど重要であったかは私にはわからないが、後の「キリスト教」にとっては重要となったことは間違いない。

福音書におけるマリアに関して他に問題になることはいくつかある。たとえばルカは明らかにマリアを特別に位置付けているが、その理由や意味については、本稿の範囲を超えるので扱わない。本稿とかかわるのは、イエスの死の場面である。共観福音書では、そこに「ガリラヤから従ってきていた婦人たち」がいるが、マリアの名は出ない。復活のときも同様である。しかしヨハネ伝では、イエスが処刑された十字架のそばにマリアは、マグダラのマリアなどとともに立っていた(19・25)。マリア信仰において、ルカとはまた違った意味においてヨハネは(同一人物かどうかはわからないがその名による黙示録を含め)重要な意味を持つ。

「マリア被昇天」の観念は、四世紀の外典にはじめて登場するという。また「マリアに捧げられた聖堂が建立されたのは、大体、紀元四百年くらいが最初」であるとされる⁵⁾。

マリア信仰の歴史において重要な画期は431年のエフェソスの公会議である。そこでマリアは「神の母」(theotokos)の称号を公認された。この呼び名は「3世紀初めからアレクサンドリアの教父によって使われて」はいたという⁶⁾。概説書だとこの会議の眼目は「ネストリウス派の異端宣告」である。しかしマリアのこの位置づけはそれに劣らぬ意味を持つのではなかろうか。というより詳しくみれば両者は関連している。ネストリウス派(テオトコスというこの称号には反対で「キリストトコス」が代案)は、すでにニケーアの公会議で異端宣告されたアリウス派と半分重なっており、いわばアリウス派的な、「父なる神」とキリストとの「同一本質」を認めたくない気持ちからの悪あがきとみられないこともない。「正統派」が生まれたときから神=人とすることによって、マリアが「人間イエスの」母であるだけでなく「神の母」とも呼ぶのに対して彼等はイエスが「生まれたときは人(同時に神、ではなく)」とするからである。心理的には、イエスの神格化が先行したのか、マリアを高く位置付ける欲求が先行したのかどちらであるかはわからない。前者なら「神の母」という称号は論理的ではあるが、ただそういう帰結を伴う決定をこの公会議がした理由は何か、という形で問題は残っている。ネストリウス説が論理的に成り立たないとは思われないからである。するとここで考えたいのは、そもそもこの公会議がなぜエフェソスの地で行われたかということである。「使徒行伝」によれば、そこはキリスト教が早くから伝えられており、パウロが宣教したことで信者が増えたという。他方そこで起きた騒動についても述べられている。すなわちパウロが物神崇拜を否定したことにより、アルテミス神殿の模型の細工師がそれでは偉大な女神アルテミスの神殿がないがしろにされようと声を上げた。多くの人が賛同して集会を開き、しずめようとしたユ

ダヤ人に「エフェソス人のアルテミスはえらい方」と二時間叫び続けたと（19：23-34）。つまりエフェソスはアルテミス女神信仰の中心地だったのである。五月は聖母に捧げられると教会は規定したが、もともとはエフェソスのアルテミス女神の祭りがあった月である。そこでは乳房をたくさんつけた豊穡の女神像が発掘される。その民衆ではすでにマリアが「安産の守り神、子さずけの女神、病気の癒し手、争いの仲裁者として地母神に変わり敬慕を集めていた」⁷⁾。そうであるがゆえに、キリスト教におけるマリア信仰の高まりにも重要な場となったのではないかとの推測がなされる。すなわちアルテミスとマリアとの習合である。本来は異教に属するものがキリスト教に取り込まれたのは、クリスマスをはじめ少なくない。伝承によれば、イエスの死後ヨハネはマリアとここに住み、エフェソスはマリアの終焉の地とされた。4世紀には（つまり公会議に先立って）ヨハネとマリアにそれぞれ捧げられた聖堂ができていた⁸⁾。その「家」などが巡礼の対象となっており、つまりマリア信仰の中心地だったのである。公会議の会場もそのあとであった。

すなわちここで私達がみるのは、地母神との習合によって聖母の観念が確立したという事情である。エフェソスという場所が既にそれに向けられて設定されたらしい⁹⁾という推測は自然である。カトリックの立場で書かれた『キリスト教史』はなぜエフェソスかにはふれていない¹⁰⁾。召集は皇帝テオドシウス二世、中心になったのは反ネストリウス派の指導的立場の司教キュリロス。また竹下氏は、聖母制覇のいわば消極的な理由の一つとして、これがまさに当初の信仰枠組みの外にあったことから、自由なイマジネーションの余地があったとみている¹¹⁾。

最大の教父アウグスティヌスは正面から論じていない。彼がエロスに価値を認めなかったことと、ユングは関係づけている¹²⁾。

マリアが「神の母」と公式に位置付けられるまでの過程をみてきた。その要因として、地母神信仰との習合が考えられる。ただ異なる宗教が会うときに常に習合が起こるだけではなく、排除が行われて一方が消滅したり「棲み分け」られたりすることもある。また広義の習合であっても、垂迹説や権現思想、あるいは守護神化のように肯定的に結ばれるだけでなく、ある宗教の「神」が他宗教の「悪魔」に化するような場合もある。マリアの格上げまたは疑似神格化には、キリスト教徒自身の心理的動因もあったと考えなければなるまい。それは女性的、特に母性的原理の位置づけの要求である。ユダヤ教はきわめて父性的な宗教である。（初歩的な例は、女神を含む多神教と異なり「父なる神」の一神教であることである。）イエスの教えはそのことを含むユダヤ教批判が本質的であった。（これは定説とは言えまいが、本稿で説明する余地はない。）しかしそのことは十分に受け止められず、「福音書」（特にマタイ伝）編成の過程から既にこれをユダヤ教の枠に押し戻す力が働いた。ペテロ、パウロの線を中心に制度化された「キリスト教」でも抑圧された面が強い、この女性性・母性性の権利請求の心情が、マリア信仰形成に働いたのではなからうか。

より哲学的な観点から、二点を考えたい。一つは、この女性性・母性性の位置づけとは、「自然」と「心情」の位置づけということである。ユダヤ教は自然と（いわば人間的自然である）心情とに對立的であり、主意的でいわば冷厳な宗教である。これに対しマリア信仰を組み入れていくことで、より温かみのあり融和的（かつ宥和的）なものとして「キリスト教」が形成されてきたと言えるのではなからうか。第二点は神一人の関係性についてである。ユダヤ教においても人は神の「似姿」とされていたが、それだけだとまさにせいぜい「類似本質」にとどまり得るもので、実際両者の差異のほうに力点があった。キリスト教ではまずイエスが（あくまで人間であるモーセと違い）「神人」

であり、造物主である神と父子関係におかれる。それでも「創る-創られる」と違う「生む-生まれる」という関係性を端的に表すのはやはり母子関係であり、人間マリアが「神の母」であることによって、神と人との同質性は、それゆえ共感、同情、憐れみの条件が、はっきり強くなったということが言える。

二 中世

本稿の主題はマリアにおける「憐れみの心性」の探求であった。前節においてはまず人間イエスの母マリアが「神の母」として宗教的に位置つけられていく過程をたどった。それは異教の母神崇拜を取り込むことで、ユダヤ教の意志的で父性的な宗教心性と異なる、自然や感情に宥和的な感受性をもたらした。さらにこの母がわが子を殺害されそれを悼み悲しむ母であることによって、西洋の異教と異なり、憐れみの宗教的意義づけにも寄与することを論理的に可能にする。しかし心理的には古代には主として潜在的であったように思われる。マリアの意味付けは多様であり、はじめは女王にまがうものとするイメージも強かった。その中で「同情」「憐れみ」が重要になっていったのは、中世においてであるように思われる。十字架のイエスに苦悩と悲嘆に泣き崩れるイコンは中世以降であるという¹³⁾。ヨハネ伝でマリアは十字架のもとに立っているが泣いているとは記されていない。「Ave Mariaの祈り」がつくられたのは1050年頃である。

アデマール・ド・モンティユ (?-1098) は十字軍の最初の扇動者の一人であるが、*salve regina*の祈りを書いた。

マリア信仰の歴史においてきわめて重要な役割を果たしたのがベルナルド (Bernard, 1091-1153、聖ベルナルドゥス、クレルヴォーのベルナルド) である。フランス人でパリに学び、シトー派の修道院に入り、多くの僧院をクレルヴォーに設立したが、マリアへの思いが特に強かった¹⁴⁾。ロザリオの祈りを広めた。マリアの母乳がベルナルドの口に飛び込む絵も後に描かれている。彼のマリア信仰の強さの理由は何か。彼がいわば理屈よりは感情の人であったことが一つの理由ではなかろうか。多くの著作があるが、旧約の「雅歌」の注解で知られることもその裏付けと言えないであろうか。今日の「哲学史」ではさほど重視されないが、中世の精神史において大きな影響を与えた人物である。それゆえ時代的な背景も考えるべきであろう。12世紀の西欧は、ある種の感情性や内面性の高まりを経験していたのではあるまいか。とりあえず考えられるのは、文芸において「恋愛」の重視(発生?)がみられることと、宗教において告解が重視されてくることである。ベルナルドの思想は聖者伝『黄金伝説』などを介して、13世紀の聖フランチェスコやボナベントゥーラにも影響を与えた。

慈悲ないし共苦を表す聖母像が作られてくるのもこの時期のようである。矢崎美盛の挙げる、「慈悲のMadonna」*Madonna Misericordia*の像や「哀しみの母」*Mater dolorosa*はそれにあたる¹⁵⁾。

13世紀にも重要な動きがいくつか挙げられる。最大のスコラ哲学者アキナスはマリアの被昇天を支持した。同じく重要なスコラ哲学者のボナベントゥーラは、マリアにおいて威厳より優しさを重視した。ヤコブ原語聖書、擬マタイ福音書では、マリア誕生の物語がつくられた。

14世紀初め、フランシスコ会士ヤコボーネ・デ・トーティ (1230-1306) が「スターバト・マー

テル *stabat mater*」を作詞した。これはヨハネ伝の記述をさらに発展させ、イエスの死を悲しむマリアを歌ったもので、マリアを「憐みの人」として描いている。冒頭は「聖母は苦しみにみち／わが子が死に苦しむ十字架のそばで／心から泣いていた／聖母の心は沈み／痛み苦しみにみちていた」¹⁶⁾。これはその後、パレストリーナ (16c 末)、ハイドン、ロッシーニ、ヴィヴァルディ、ペルゴレージなど、錚々たる音楽家たちによって作曲されていくジャンルになる。

同じく 14 世紀の初めに現れたダンテの『神曲』は当時のカトリックの世界観を描いたものであり、そこで死後の世界とされていた地獄、煉獄、天国が作品の三篇に割り振られている。その天国編 33 歌の最後の 31 からマリアが現れる。それを可能にしたのは、同じくそこから主人公の案内役となったベルナルドである。最初の案内役であるウエルギリウスと対になる形であり、ダンテがどれだけ彼を重視していたかがわかる。そのマリアは、「汝に慈悲 [*misericordia*]、汝に憐れみ [*pietate*]、汝に寛大 [*magnificenza*]、汝に被造物の、よきものすべて集まれり」(33:19-20) と歌われる¹⁷⁾ *pietà* でなく *pietate* という語を使っているのは、単に脚韻を合わせるためであろう。

ところで一般の日本人が「ピエタ」と聞けば、ミケランジェロの彫像、それもサン＝ピエトロ大聖堂にあるそれを思うであろう。その際「ピエタ」が「憐れみ」を意味するイタリア語 (*pietà* : 英語なら *pity*) であることまで知っているのは多くないかもしれないが。しかし「ピエタ」はその一つの作品の名称ではなく、ジャンルを表している。『世界美術大辞典』の項目「ピエタ」¹⁸⁾ ではまず次のように規定している。「聖母マリアがキリストの遺体を膝に抱いて嘆き悲しむ図像のこと」(ただしこの事典は、「キリストの遺骸を支える〔聖母でなく〕マгдаラのマリア」の木彫りの写真も、「ピエタ」として掲げている)。次にその説明がある。「『敬虔』『哀れみ』などを意味する『ピエタ』という語は、図像の名称であるよりも、キリストの受難 [*passio*] に対する信徒の『共感〔同情〕(*compassio*)』、すなわちキリストの苦難に嘆き悲しみ、自らもそれを分かち合おうとする神秘的・内省的な感情を示している」。「(神秘的・内省的な」という形容はなくもがなではなかろうか) 続いてその「起源と伝播」の説明があり、14 世紀以降とされ、最初のピエタ図像「フェスパービルト (*Vesperbild* 夕べの祈り)」は主にアルプス以北で普及したとする¹⁹⁾。復活祭の前の金曜の夕方、信者たちがこの像に祈りをささげるといのように、典礼のうえで明確な役割を持っていたという。またこの事典は、「聖母子像の幼児をキリストの遺骸に置き換えることによって生み出された図像ではないか」と由来を想像する。そして「イタリアでは十五世紀以降作例がみられるようになり、『ピエタ』となづけられる」と。

マールは「十四世紀になると、『キリストの受難 (*Christi Passio*)』が語られるのと並んで、『マリアの憐れみ (*Mariae Compassio*)』ということが言われ始まる」と記し、絵画と彫造における「ピエタ」の諸作を紹介・検討している²⁰⁾。

ミケランジェロの「ピエタ」に関しては、まず以上のように既にジャンルとしての「ピエタ」があったということが考えられなければならない。次にミケランジェロの「ピエタ」は一つでなく、四つあるということである。私達がみな知っているサン＝ピエトロ大聖堂のものは 1499 年に完成した。他に、「フィレンツェのピエタ」と呼ばれサンタ・マリア・デル・フィオーレにあるもの、「パレストリーナのピエタ」と呼ばれるもの、ミラノのスフォルツァ城市立博物館所蔵の「ロンダニーニのピエタ」と呼ばれるものである。

最も早い「サン＝ピエトロのピエタ」は、枢機卿ジャン・ド＝ビレール・ド＝ラグロワが注文

主である。当時イタリアではピエタ像はきわめて少なかった（ただしボローニャのサンドメニコ教会にドイツ人によるピエタ像があったという）ようだ（ただし画題としてはあった）が、彼はサン＝ドニ修道院長を勤めていたフランス人であり、フランスやドイツではピエタの木像が作られ典礼で用いられていたという。彼は自分の葬儀の記念のためにピエタ像を求めているミケランジェロに依頼した。以上からわかるのは、この「ピエタ」の最初のきっかけは彼自身の創作意欲からでなく客の注文によるということである。しかしその作り方において「前例通り」でないところがあれば、作者の考えとしなければならない。そして最も前例と異なったところは、マリアの若さであった。注文主が「マグダラのマリアの間違いではないか」と非難したことから、異例のものであったことが裏付けられる。これに対しミケランジェロは、原罪のない聖母マリアは歳をとらないと答えた。マリアの無原罪性の教義が浸透していたことがわかる。なおこの像がはじめに設置されたのは、サン＝ペトロニッラ礼拝堂にある注文主の墓の上であり、その後何度か移転して1749年に現在地に置かれた。

他の三点のミケランジェロの「ピエタ」はいずれも晩年に手掛けられたものであり、それは注文によるのではなく自分の墓所に飾るためだったという。そのうち「フィレンツェのピエタ」は、作者自らが一部を壊した未完成品である。1721年よりサンタ＝マリア・デル＝フィオーレ大聖堂に置かれている。『神曲』の一節を動機とし、聖母のほかにニコデモとマグダラのマリアもイエスの遺体を支えている。「パレストリーナのピエタ」（真作であるか疑う研究者もあり）は1939年より、フィレンツェのアカデミア美術館に置かれている。「ロンダニーニのピエタ」はミケランジェロの遺作である。1952年より、ミラノのスフォルツァ城博物館に置かれている。

17世紀にピエタ像が全盛になったという²¹⁾。

ルネサンスを「中世の秋」とみるか「近世の始まり」とみるかは、論争が続いている。両方の面がある、というのは無難な言い方で、後はどこに注目するか、何を重視するか大きく依存する問題であろう。ただ、ダンテとミケランジェロにおけるマリア信仰に注目するなら、それは「中世の秋」のほうに傾くであろう。そしてこの問題における「近世の始まり」はプロテスタンティズムからとなろう。

三 近世以降、および考察

プロテスタントはマリア信仰に対しより消極的である。一般的に否定しているわけではない。しかし力点としては、それを抑える方向性がより強い。マリアを神格化するようなマリア「崇拜」と言われるような信仰や、マリアにイエスに劣らぬような「とりなし」の力を認めることへの批判が、中心的な論点である。しかしこれらはカトリックにおいても公式には同様である。ルターは、マリアを称賛しすぎたとしてベルナルを非難した²²⁾ように、この対立においては、教義の論理よりも心理により本質的なものがあったように思われる。すなわちプロテスタンティズムの主知的傾向が、マリア信仰の主情性と対立したのではなからうか。またプロテスタンティズムにおいては、キリスト教におけるユダヤ教的要素（律法や旧約一般をより重視することなど）への揺り戻しの面がみられる。マリア信仰への心理的抵抗はこのこととも関連していよう。

しかし少なくともカトリックでは、近代以降もマリア信仰はさらに発展する。1854年、教皇ピウス九世は、マリアの無原罪説を教義として採用した。1950年、教皇ピウス12世はマリア被昇天を教義として採用した。どちらも古代からあった観念であるが、19世紀・20世紀になって教会に公認されたわけである。なおこのほか20世紀のカトリック教会におけるマリア関係の決定としては、1964年の第二バチカン公会議での「教会憲章」「エキュメニズム教令」、1974年のパウロ六世の勸告 *Marialis cultus*、1987年のヨハネ＝パウロ二世による *Redemptoris mater* がある。

深層心理学の創始者であるフロイトは、その理論を宗教にも適用した。マリア信仰に関しては、晩年に、「偉大なるかな、エペソスのディアナ」という小文がある。アルテミスの女神神殿を中心ににぎわったこと、パウロがそこにキリスト教の教会を立てたが、ヨハネの影響下に入ることにより「使徒の教会に並んで、キリスト教信者の新しい母なる神に捧げられた最初の聖堂が建てられ」、町が「名前以外は前とほとんど変わらない」「自分たちの偉大な女神を取り戻した」と記している。教義的にはマリアは「神の母」と位置付けられても神そのものではないと言われようが、心理学的には重要な区別ではないと言いつ返されるかもしれない。ただしフロイトはこれに深い分析を加えていない。

深層心理学からマリア信仰を重視したのはユングであった。そこには、男性的・意志的・西洋的・近代的な原理に対する、女性的・感情的・東洋的・前近代的なものの評価要求がみられる。この意味でまさしくユングがマリア信仰を肯定的に意義付けようとしたのは彼の思想的立場からはいかにもと思われる。「大事なことは、この信仰を推進する力が学者や聖職者の神学論争から起こったものではなく、民衆運動の中から生まれてきたという点」²³⁾ だという指摘は、(ユングの思想そのものに必ずしも賛成でない) 私としても重要であると考え。植田重雄氏は、仏教においては同様な現象が観音信仰にみられるという。そしてわが国の「マリア観音」という習合(?)形態において、マリアと観音との親近性を指摘しているのが興味深い²⁴⁾。

竹下氏はこうした女性性の復権要求の基盤として、さらに、「それまで弱肉強食の資本主義の論理で発展してきた西洋的な父権的社会」への反省をみている²⁵⁾。逆方向への反動としての、ヒステリックやエコロジズムやカルト教団、現実逃避的な奇跡・超常信仰への彼女の警戒と合わせて、おおいに納得される見解である。

- 1) 聖書からの引用は、本文中に編名と章・節を記す。訳文は新共同訳を参照した。ただし新約については、次に基づき訳文を変えたところもある。*The Greek New Testament*, United Bible societies, 1975³⁾。
- 2) 竹下節子『聖母マリア』講談社(叢書メチエ)、1998、11頁
- 3) Lidell & Scott, *Greek-English Lexicon, Oxford 1977*, では maid, maidon, virgin とある。
- 4) 竹下節子、前掲書、123頁。
- 5) 矢崎美盛、『アヴェ・マリア』岩波書店、1953、20頁
- 6) 『岩波キリスト教辞典』2002(項目「テオトコス」木寺廉太執筆)
- 7) 石井美樹子『聖母のルネサンス』岩波書店、2004、35頁。
- 8) 『岩波キリスト教辞典』(項目「エフェソス」尾高毅執筆)
- 9) 湯浅泰雄『ユングとキリスト教』人文書院、1978、232頁。
- 10) マルー『キリスト教史2』上智大学中世思想研究所編訳、講談社、1990。キュリオスがマリアを「神の母」と

した発言には触れている(224頁)が、この公会議の論題としてはキリスト論が記述され、エフェソスのアルテミス信仰だけでなくマリア信仰にはまったく触れられていない。また会議に「姦策」や「買収」があったこと(たとえばギボン『ローマ帝国衰亡史』第四十七章などに詳しい)を述べながらも、その後の調停で見事な解決になったと評価している。

- 11) 竹下節子、前掲書、47頁。
- 12) 湯浅泰雄、前掲書、273頁。
- 13) 竹下節子、前掲書、33頁。
- 14) マリアについての彼の著作としては、聖ベルナルド『おとめなる母をたたえる』古川勲訳、あかし書房、1983、がある。
- 15) 矢崎美盛、前掲書、98頁、同101頁。
- 16) 植田重雄『聖母マリア』岩波新書、1987による。
- 17) Dante *La Divina Comedia*,Paradiso,Le Monnier,Firenze,1978?, pp.544-545。
- 18) 『世界美術大辞典』(小学館、1989)項目「ピエタ」。
- 19) 矢崎美盛によれば、これは、14C、ことにドイツで盛んに作られた(前掲書108頁)(1298ケルンがはじめか)。
- 20) マール『ヨーロッパのキリスト教美術(上)』柳、荒木訳、岩波文庫、1995、58頁および以下。
- 21) 竹下節子、前掲書、89頁。
- 22) 澤田昭夫『ルターはマリアを崇敬していたか』教文館、2001、91頁。もちろん詳しくはルターと他のプロテスタンティズムとの違いが考えられるべきであろう。
- 23) 湯浅泰雄、前掲書、76頁。
- 24) 植田重雄、前掲書、208-209頁。
- 25) 竹下節子、前掲書、147頁。

Of the mentality of pity in the faith in Saint Mary

NAKAJIMA, Yoichi

As historical facts, it is very doubtful that special status was given to Mary in time of earthly Jesus. But afterwards she was characterized as <the mother of God>, by the syncretism with the pagan goddess on the one hand, and by the believers' feeling on the other.

Among her virtues the pity or compassion became more and more important, which we may realize such as in Dante and Michelangelo.

In the modern age, some credos about Mary were authorized by the church. It is remarkable that this was accomplished by the force of popular desire, which longs for the salvation from the heartless capitalism of our society.

Key Words

pity, Saint Mary